被災地に音楽を

なぜ震災当日も翌日も演奏したのか　日本フィル理事長の信念

山田奈緒　社会 | カルチャー | 速報 | 映像・音楽

毎日新聞 | 2024/3/4 12:00（最終更新 3/4 12:00）　有料記事　2809文字

日本フィルハーモニー交響楽団の平井俊邦理事長＝東京都千代田区で2024年2月1日、内藤絵美撮影

電車が止まり、携帯電話もつながらない。帰宅難民であふれる2011年3月11日の東京。東日本大震災が起きたその夜も、そして翌日も、日本フィルハーモニー交響楽団は港区のサントリーホールで予定通り演奏会を開いた。批判もあったが、「音楽家になにができるか」を考え続けてきた楽団が出した答えだった。今も被災地とつながる日本フィルの理事長、平井俊邦さん（81）に話を聞いた。【聞き手・山田奈緒】

もうすぐゲネプロ（最終リハーサル）という時の地震でした。オーケストラのメンバーは集まっていて、建物は安全確認が取れました。余震はあっても、ゲネプロはできました。

杉並区にある事務所には「予定通り開催するなら、聴きに行きたい」との電話が入りました。お客さまが一人でも来られるなら開催しようと決めました。いらしたのは、77人でした。

翌日、津波の惨状がニュースで繰り返し放映されました。福島の原発もどうなるか分からない。楽団内に「他も自粛するのだから、うちもやめよう」という声はありました。

ですが、今日は昨日より悪くなっているのかといえば、東京はそうではない。自分たちの判断で開演しました。来場した758人のお客さまとともに黙とうをささげてから音楽が始まりました。

あの時の音楽はまるで、祈りのようだったと思います。3月11、12日は大きな節目になったと今では考えます。圧倒的な自然災害を前に、どうしたらいいのか、なにかやれることはないのか、まとまらない考えのまま聴きに来た人が多かったのではないでしょうか。

1週間後の香港公演も予定通り行いました。計画停電や余震が続く日本に家族を置いて行っていいのか、迷う楽員も多かったでしょう。「日本は壊滅したと海外の人は思っているだろう。でもそうじゃない。必ず復興すると伝えたい」。出国前、練習会場で私が言うと、反対の声は出ませんでした。香港公演は大成功。割れんばかりの拍手と涙と熱気を今も覚えています。

当時の指揮者だったロシア人、アレクサンドル・ラザレフに感謝しています。ラザレフが滞在していた東京も放射性物質の影響があると世界中で報じられ、モスクワのご夫人は「早く日本から帰ってきて」と泣いて訴えていたようです。チェルノブイリ原発事故を知るラザレフ自身、怖かったはずです。香港公演後は神に感謝し、涙が出たそうです。

インタビューに答える日本フィルハーモニー交響楽団の平井俊邦理事長＝東京都千代田区で2024年2月1日、内藤絵美撮影

「被災地に音楽を届けたい」。楽団の労働組合に相談したのは香港からの帰国後です。震災当日も翌日も音楽を求める多くの人がいたこと、香港での熱気、これらに感化されたように思います。

ただ、経営状態に余裕はまったくありませんでした。民放の専属オーケストラとして1956年に誕生しましたが、72年に契約を打ち切られてからは大きなスポンサーを持たずに自主運営を続けています。ピーク時の債務超過は3億4900万円。震災時も債務超過は続いており、ようやく光が見えてきたような時期でした。

私が労働組合に「相談がある」と言った時、「給料の遅配だろうか」と思われたぐらいです。ですが、被災地訪問への思いを告げるとあっさり賛同してくれました。「阪神大震災の時も音楽を届けたので、できます」と。私が言わなくても、きっと誰かが言い出しただろうと思います。

東日本大震災の被災地で、バイオリンを奏でる松本克巳さん（中央）ら＝宮城県名取市で2011年5月8日午後3時16分、手塚耕一郎撮影

被災地での演奏会の様子は、すべてリポートに残していますし、楽員から直接、聞くこともあります。「音楽をやっている場合なのか」という葛藤を楽員が抱えていたことも承知しています。それぞれに自問しながら、演奏を重ねました。

仮設住宅や避難所、小中学校、病院、高齢者施設などで続けた演奏は13年間で340回に上ります。なぜ続けられたかというより、やめられなかった。それは、楽員も私も同じでしょう。

「お父さん、もう少しこっちで頑張るね」。震災で夫を亡くした女性は、演奏を聴いてこう決意したそうです。その年の5月ごろの話で、女性は「2

カ月分の涙が出た」と楽員に打ち明けました。女性は、感情を無にすることでしか、崩れ落ちた心を保てなかったのかもしれない。音楽だからこそ心を揺さぶり、開き、癒やしにつながることもあるのだろうと感じました。

ただ、「被災地」という言葉をいつまで使い続けるのか、悩みもしました。17年、演奏活動について被災地のニーズ調査をすると、求められているのは「心のケア」に加え、「文化芸術に触れる機会」「住民の交流の機会」「被災地の現状の発信」だと分かりました。

リハーサルに参加するビオラの中川裕美子さん（右下）とチェロの山田智樹さん（中央）＝東京都杉並区で2024年1月12日、内藤絵美撮影

同じ音楽を共有する時間はどこか特別な空気を生みます。音楽がコミュニティーの活性化につながれば、との思いで、地元の吹奏楽部の指導や楽器の演奏体験など参加型の活動にも力をいれていました。ニーズ調査を元に、それを発展させたのが「東北の夢プロジェクト（夢プロ）」です。

夢プロでは、オーケストラが剣舞や虎舞など郷土芸能の伝承に取り組む子どもたちとコラボしたり、吹奏楽部と一緒に演奏したりしています。子どもたちの生き生きした表情に、新たな音楽の可能性を感じます。若者が担う文化を世界に発信していきたい。きっと、未来の街づくりにつながるはずです。

私は日本フィルの経営再建を託された元銀行員です。なぜ、厳しい財政状況でこうした活動を続けるのか不思議に思われるかもしれません。ですが、愚直に「音楽家になにができるか」を考え続けることは、音楽団体として必要不可欠だと思うのです。

日本フィルが届け続けた音楽は、ぜいたくな非日常ではなく、純粋な人と人との交流でした。だからこそ、震災から13年がたっても、被災地から「来てくれないか」と声がかかる。求められるのは心が通い合い、なにより良い音楽があった証しであり、とてもうれしいです。

音楽には力がある。私は日本フィルの音楽に魅せられた一人です。元日に能登半島地震が起きて「音楽家になにができるか」を改めて考えています。地元の「オーケストラ・アンサンブル金沢」と連絡を取りあっています。私たちの経験を生かせる場面があるならば、存分に使っていただきたいと思っています。

ひらい・としくに

1965年慶応大経済学部を卒業後、三菱銀行（現三菱UFJ銀行）に入行。取締役（香港支店長・本店営業部長）、常勤監査役などを歴任。千代田化工建設専務取締役、インテック副社長などを経て、2007年に日本フィルの専務理事となり債務超過の解消を進め、14年から現職。

インタビューに答える日本フィルハーモニー交響楽団の平井俊邦理事長＝東京都千代田区で2024年2月1日、内藤絵美撮影

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。
画像データは（株）フォーカスシステムズの電子透かし「acuagraphy」により著作権情報を確認できるようになっています。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.